

靖国行きの片道切符

第一次長沙作戦

秋田県 河越 三治郎

昭和十四年六月二十八日召集令状を拜受。七月二日、東京赤坂、近衛歩兵第三連隊に入隊。秋田に生まれ、男の夢である近衛兵とは家門の誉れ、また一族の誉れでもあったが、責任も重大であることは覚悟のままである。村（秋田県仙北郡藤木村）では後にも先にも、近衛兵は私一人である。役場の兵事係が祝杯の清酒を二升特配として持ってきてくれた。それを知って部落の人たちは激励の挨拶に来られ、私はこれに応えねばならぬと決意した。

家族は健在だから別に心配することもないが、一応親戚に顔を出して今後のことをよろしく頼んだ。どこへ行っても「近衛、近衛」と歓待してくれ、本当にその思いやりと激励には頭の下がる思いであった。

長い農村恐慌に耐えかねて「昭和初期の不況」に傾きかけた家運を懸命に支えている親父の後ろ姿を見ると、可哀想でならなかったが、私の身は公私混同は許されない。役場から贈られた祝い酒を立ち振る舞いの「小宴」に部落、親戚等の人々を招待し、夜遅くまで飲み交わした。親父も日露戦争に従軍した人で、出征の心得は何よりも心強く感じていてくれた。

明るく門出の朝、氏神に武運長久を祈り、家族ともお神酒を交わして、国民服に奉公袋を腰に応召の肩かけをし、部落のはずれで幟や小旗を持って多数の方の見送りを受け、歓呼の声の中を駅に向かった。奥羽本線飯詰駅の広場は超満員の見送りと征く人の波であった。しかし、定刻の交換列車がホームに入ったが、下りの列車は白い布に包まれた「遺骨」の護送列車であった。これを見るや、時の在郷軍人分会長、陸軍少尉伊藤興七郎氏の「最敬礼」の号令で、広場は水を打ったように静まり、目礼して「直れ」の号令と同時にその護送列車の指揮官が答礼して発車した。

七月二日午前八時、営門集合。営門には太字で「近

衛歩兵第三連隊」の看板、脇に着剣した歩哨が立哨中である。周囲には憲兵が右手を後ろにして横目で見ている物々しい雰囲気であった。このようにして、私は軍人としての第一歩を踏んだのである。

私の兵籍の概要は次の通りである。

昭和十四年七月 四日 近衛歩兵第三連隊入隊

(陸軍二等兵)

同 七月 十九日 迫撃砲第一大隊要員とし

て中支に転属、第一中隊長 陸軍大尉梅木文夫

昭和十五年四月十二日 陸軍上等兵として宜昌作戦

参加

同 六月 十九日 呂雉鎮戦闘に参加

同 十一月 十一日 漢水作戦参加

昭和十六年三月 一日 錦浜作戦参加

同 八月二十九日 第一次長沙作戦参加

昭和十七年四月二十五日 第一次浙贛作戦参加

同 十月 六日 第二次浙贛作戦参加

同 十一月 十三日 陸軍兵長

同 十二月 十九日 東部第四十一部隊に転属

同 十九日 召集解除

私は召集を受けてから満三年半、中国大陸の中支といわれる戦地で勤務し、内地での初年兵時代、外地での迫撃砲第一大隊での訓練、警備、作戦と、連続した軍務に服し、宜昌作戦、長沙作戦等を体験した。第一次長沙作戦の前期での体験を記す。

八月の声を聞くと、大作線の噂が広まった。正式には何の指示もなかったが、兵隊は耳利きして電波のように伝わる。

「軍は岳州地区に弾薬、食糧等々の集積を始めた。負傷者の収容に備えて兵站病院は患者を退院させるか後送しているようだ。恐らく長沙に違いない」とまことしやかに触れるのだ。連隊長に何うと「そんなことを言っているのか。具体的には知らんが、何があっても良いように準備しておけ」と驚かれた。戦場では何事でも生死に直結するから、機密中の機密が兵の五感で察知されロコミで電波のように伝わった。

かくして作戦準備が始まり、集中行軍が始まった。

暑い盛りのおかげで、なぜもう少し涼しくなってから作戦しないのだろうかと嘆く毎日で、口射病に罹る兵の続出であった。

現地入隊の初年兵には、かなりの負担である。三〇―四〇キロもの装具を背負った兵隊は難行軍であった。連隊長は乗用車で移動されたが、いちいち兵を勞われていた姿が日に浮かぶ。また作戦参加は初めての初年兵が休憩ごとに荷造りを直していた姿が印象深い。

不期遭遇戦についての思い出。

九月十三日ごろ司令部から伝騎が飛んできた。山の斜面の隘路を出ると、今まで山に断たれていた砲声が俄かに轟き出した。耳をすますと、ただごとでない。近づくとつれて激しさを増し、彼我の砲声の区別がつかない。新米の将校が慌てるが無理もない。

我が砲兵部隊は敵の渦中に包囲されただけに中隊長独自の判断で砲列を敷き、観測手が目測で「九五〇」というと「次射角何分角何十。撃てっ」と、六門が一

斉に撃ちだした。さらに観測班長は落ち着いて「諸元を出せ！ 河（私はこう呼ばれていた）。「ハッ！」

……。「来た伏せッ」と誰かが怒鳴る。シュー、シュー、

ダダン、ダン。切り一面に敵の迫撃砲弾が落下した。爆煙が沢風に煽られて沢伝いに流れて消えた。

「河、どこへ行った」と叫んでいるが爆音に耳がジーンと鳴り聞こえなかった。気が付いたら、観測器材の測遠機を持ったままで沢に転がり、その時山の斜面に落下した迫撃弾に掘り起こされた岩が自分の体にのしかかっていた。そこから自力で這い出したが、班長が「河は死んだ」と思い諦めていたという。

中隊長の撤収命令で砲を分解、駄載し、谷川に沿った細道を辿りながら行く。山陰にある小さい患者収容所に充てられている民家が見えた。この収容所を覗いて見たら悲惨この上もない。目をそむけながら軍医を探すと、マラリアを治してくれた久保田軍医だった。

久保田軍医は目を血走らせて手当ての最中であつた。そこで連隊本部の位置を尋ねたが口もきいてくれぬ。衛生兵からようやく「あっちの方角のようだ」と

聞いて馬を急がせ、点々という後方の兵に尋ねながら幅五〇メートルの砂河を渡っていると、迫撃砲弾が二、三発近くに落ちた。狙われたようで気味悪く、伝騎（伝令の馬）を督励して必死で渡り越え、山陰の部落に入った。ところがそこは高田部隊の患者収容所で、そこも目もあてられぬ惨状を呈していた。ここでも部隊本部を聞いても誰も解らない。困ったあげく銃砲声を目当てに南下すると、一人の下士官に会ったが「こちらじゃない。あっちだ」という。「あっち」の方に進むと急射撃を受けた。トトンバン、トンバシッと射弾が身を包む。泡食ってトンボ帰りで難を避けた。当たらないのが不思議なくらいである。山陰を歩くと「戦場を勝手にうろつくバカがいるか？」と、さんざん怒鳴られた。そうして丁寧に本部位置を教えてくださいました。

「師団と連絡が取れずに困っていた。良い時に来た」と前置きされて、手短に話された要点は「師団に行き、主力砲兵（迫撃砲も含む）部隊に正面を叩くように伝えてくれ。弾丸の補給も頼む。またすぐ有線を

引くよう言ってくれ。歩兵の中隊、こっちは不意に遭遇した。向こうは待ち受けた。苦戦だよ。戦場では、いつ、何が起こるかわからないのだ。よく覚えておけ」と言われた。

作戦前の戦闘であるが、一晩中、銃砲弾の音が絶え間なく続き、時々曳光弾がシューーン、プスッと近くに飛んでくるが眼には見えない。いつしかとろと眠っていると山砲の一斉射撃が始まった。続いて迫撃砲も撃ち始めた。飛び起きて近くの小山に登って見ると、正面二キロぐらいの幅に我が砲弾が帯状に炸裂して壮観であった。

青い信号弾が各所に上がった。攻撃開始である。山陰から現れた縦隊が、幅広く散開して接敵してゆく。しかし、昨日とはうって変わって、敵は一発も応射しない。

もう撃ち出すか、弾幕を張るか、固唾をのんで見守っていたが、日の丸を持った友軍は難なく山脚に取り付き、ダッダッダッダと力強く撃ち出した数丁の重機に援護されて山をよじ登り、突撃、山頂で日の丸を

振った。

私はそこで稜線に乗り出して、目の下を流れている沙港河と敵の南岸陣地とを遠望した。河幅こそ五〇〇メートル余りあったが、水量は少なく、どこでも渡河できそうだった。南岸の小さい堤防には所々に掩蓋が見え、堤防の南五〇〇〜六〇〇メートルにある台地や部落には煉瓦で造ったらしいトーチカが見えた。

敵の主陣地である。何気なしに見ていると「稜線に乗り出している奴は誰か？　ここに来い」と怒鳴られた。ようやく会議が終わったのかと思つて挨拶すると「バカ、皆が集まっているのに稜線に乗り出すとは何事だ。迫（迫撃砲）の集中射を受けたらどうなると思ふ。お前がやられるのは自業自得だが、他の人に迷惑がかかることはわからんのか。また連隊の企図もぼれる。勇敢ぶつたのだろうが、こんなのは勇敢ではなく、バカの不用意というんだ」と雷が落ちた。目から火が出るようであった。

不動の姿勢で「ハッハッハッ」と、こんなに叱られたのは初めて最後であったから、とくに「連隊の企図

がばれると人に迷惑がかかる」というご注意を昨日のように記憶している。そして亀川連隊長を思い出すたびに、このことが必ず頭に浮かぶ。この注意は骨身に染みた。だからことあるごとに想い起こして、不用意に稜線に乗り出すことを慎んだ。だからこそ生きて帰れたのだろう、と感謝している次第である。

歩兵連隊の第一線は河岸に着いた、そして南岸の台地に伏せた。散発的な銃声だけで砲撃もいつしか止んだ。戦場は静かになった。すると観測手が「河越、アッ、敵がサクラ部落の裏山を逃げていく」と叫んだ。中隊長はすぐ号令をかけた。眼鏡で見ると、日本馬らしい大きな馬が砲弾にやられてもがいているのが見える。それも二、三頭はいるようだ。「友軍かもしれない、撃つな」と必死に叫んだが、時すでに遅かった。二、三発撃ってしまった。当たらないように祈ったが、爆煙が続けざまに縦隊を包んだ。南無三と祈ったが、この砲撃で第二機関銃中隊長川野任雄大尉が戦死された。

後でお悔やみを申し上げると連隊長は「川野は「友

軍にやられたとは、残念だ」と遺言して逝ったそうだ。歩・砲の連携が十分でなかったようだ。川野に申し訳ないことをしてしまった。歩兵の行動を詳しく砲兵に知らせておかねばならぬ」と沈んだ声で悔やまれた。そこで以上の経緯を報告して砲兵の誤射であったことを説明し「爆煙がはれると、なんと日の丸を盛んに振っているのが見えた。砲兵の中隊長が泣きそうに謝った」と報告して慰めると「いや、砲兵に歩兵の進路をはっきり知らせよう、注意するのを怠った俺が悪い」と自責の念に堪えないようであった。責任逃れをする人が多いのにこの連隊長の言葉は胸を打った。

この歩兵への援護射撃には、敵との距離が近いので「観測手には誤射の無いよう厳しく、特に測遠機手の俺には責任があるから、状況にもよるが迅速に、しかも的確にが要求される」と。迫撃砲は曲射弾道である。野山砲は平射弾道であるから弾着が早い。ドン、パン、この砲撃で駄馬も傷つき、その痛ましい馬を励ましたながら、裸馬にされて身軽になり、隊の後部について足を引きずりながら、頭をふりふり必死で付いて

行く姿は哀れだった。

九月二十三日朝、師団の渡河の準備が進んだが、水量が豊かで兩岸の断崖を削りながら悠々と流れていた。そこを前兵大隊は軍装のまま銃を上げ泳ぎ渡った。我が部隊は屋根だけの民家で久し振りに装具を解き仮眠していたが、ポーンと夢心地の中がかすかに砲声が聞こえた。暫くすると今度は屋根に落ちたらしい。誰も起きない、また落下した、瓦がザラザラと崩れる。迫撃砲弾である。しかし皆狸寝入りしているらしい。もし、屋根に弾丸が落ちたらそのまま大往生と、思って息を殺して眠った振りをしていたことになる。

翌朝、起きて見たら、なんと部屋の大半の屋根が破壊されていた。日本軍が今夜はこの部落に泊まることを読んで目標にしていたらしい。

連隊の幹部が作戦を練っている最中、ポーン、ポーンと連続発射音がするが、聞き耳を立てても何の音も听かない。真鍋さんが「きたぞっ、伏せろ」と絶叫されるかしない間に、私は測遠機を持ったまま転げ落ちた。白煙を上げて数十発の迫撃弾がドカ、ドカ、グワーン

と四周に落ちた。南無三、これで一卷の終わりかと硝煙にむせび、長い長い集中射が始まるがようやく止んだ。すると梅本隊長が「大丈夫か、観測班長、負傷者がいないか点検しろ」と命じられた。「異状なし」「河、測遠手はどこへ行つた」と叫ぶ。私が器材を持って起きた時だった。「大丈夫か」「ハア！」と言うと爆風にやられたかと皆が思っていたところだった。

考えてみれば、二階家の庭先で地図を広げて、あちこち指差していたのだから、敵が重要人物と見て撃つたのは当然だろう、自分の不用心にゾツとした。弾丸は地図を突き通していたから、もしも炸裂していたら上半身が玉砕していただろう。生も死も、寿命も紙一重の運命である。

追撃に移り谷間の細道を通り抜けると、足の踏み場のないくらいに生温かい遺棄死体があり数え切れない。中には生きている者も転がっていた。これほど多数の遺体を見たのは初めてであったから、戦争とは実にむごいものだと思った。なぜ見ず知らずの人と人が殺し合わなければならぬのだろうか、世の無情

を恨んだことである。

無惨な遺体を見た。戦争の悲惨さと人の無情、明日の我が身を案じて目をそむけながら焼け跡を通過し、金井の南側地区に到着すると大休止の命令がきた。

加給品の分配ではもめ事が起こる。少しでも多く受領したい一心で現員を増強して報告したり、我勝ちに受領したがるからである。

そこで連隊長は小畑高級主計を招致されて「まず第一に配属部隊、ついで大隊、直接諸隊、最後に連隊本部に分配せよ」と注意された。わが配属部隊を大事にされる気持の表れであった。だから我が迫撃砲部隊の協力はいまいくいき、犠牲も少なく、割に戦果を挙げ得たのは、配属部隊がこのように真剣になって協力してくれたお陰だと思う。

このようにしている時、偵察機から「長沙は昨夕陥落す、敵の大縦隊が貴隊の前方四キロを退却中、急追を要す、OO大尉」という通信筒が投下された、と後に上官から聞いたのである。

故郷秋田県鹿角市出身の入隊以来の良き戦友である奈良勇之助君は、中支派遣第五五三一部隊独立迫撃砲第一大隊第一中隊の第三小隊の分隊で名砲手として活躍していた。私は指揮班観測手として互いに幾多の戦闘に参加してきた。

長い作戦とは歩くことから始まり押したり押されたり、食ったり食わなかったりの繰り返しが続く。尖兵は長沙城に突入した噂もあるが、迫撃戦は止まない。九月十八日この日も暑かった、朝から嫌な予感がするので気が進まなかった。長沙二キロ前に砲列を敷き、その左後方に四一野山砲も砲列を敷き、敵も必死で抵抗。この混戦状態が午前中から続き双方とも犠牲者が続出していった。

歩兵の隊長は「あそこを撃ってくれ、こっちの方を撃ってくれ」と我が方の隊長に願っているが、あまりにも敵の陣地と我が尖兵との距離がなく難しい射撃である。それでも歩兵の隊長は必死である。しかし観測手の測遠を誤ると友軍を殺してしまう。後方の山砲の射撃による爆煙が晴れるまではどうしても測れない。

横からチェコ銃の狙い撃ちもある。ポンポンポンと迫撃砲の音がする。と、誰かの「伏せろ！」の一声で伏せると、シューシューきたなと思う瞬間グワン！グワン！とやたらと落下する。思わず「南無阿弥陀仏！南無阿弥陀仏！」と心で念じる。中隊長は観測班長に「皆、大丈夫か、捜せ」「ハァ」と観測班長も着くなっていた。今の迫撃弾は至近弾だったが運が良くて怪我はなかった。今度は手早く各砲の諸元を出し、砲列に伝え、隊長の「各個に撃て」で、砲弾は敵の背後に落下したので前にでてくる敵兵を尖兵が狙う、これも戦法の一つの術であると思う。

電灯輝く長沙市内へ駆け込む各師団。倒れた馬を励ましての輜重兵第六連隊、軍直部隊の迫撃第一大隊、迫撃第三大隊、第八師団編成の各部隊である。

攻撃中の九月十八日午後四時ごろ、迫撃砲の射撃砲主として活躍中の奈良の背を敵弾が貫通する。三日連続の戦闘で戦闘部隊は将兵共々に疲れ、疲労困憊の極みに達していた。

迫撃砲と迫撃砲の撃ち合い、怪我人、犠牲者が続出

して救護班も手が回らない。救護することもままならず時間が経ってゆく。横なぐりのチェコ銃に悩まされ、迫撃弾の無差別射撃で救護班がやられる。死者、意識のない者、真つ赤な血が患部から衣服に滲み夢中でもがいて、顔や胸やボタンが鮮血に染まり人間とは思われない。鬼神とは、この様を言ったことだろう。鞍を付けて倒れた馬を遮蔽物としていたと見られる兵が馬と共に死んでいる。二〇メートルぐらい離れたのを見るとき、いかに激戦を重ねてきたかを物語っているようだ。

このような混戦をいくらかでも早く鎮めるために、郊外に出て観測し、的確な諸元を出して砲列に伝言したら、第三小隊の田和少尉より観測場へ「奈良がやられた」との電話があった。一瞬耳を疑った。すぐにベルが鳴る。通信の山口君が、受話器を持って「河！河！」と叫ぶので、受話器に出て応対したら、田和少尉の声で、奈良が倒れたから、すぐ来いとのこと、その旨を中隊長に告げたら「砲隊鏡を川崎と代わり、す

ぐ行け」「ハア！」と飛び出す。

七〇メートル後方の凹地に砲列を敷いて、各砲隊が修正しながら射撃していたが、第三小隊だけが射撃を中止して全員で奈良の手当てをしていた。安全な場所に移そうとするが弾が近くてどうにもならない。合間を見て背負った。引きずる足を持ち、やっと家の陰に扉を敷き、その上に寝かせた（何しろ彼は田舎で相撲を取った体格の持ち主であるから、大きいし重い）。

部隊本部から久保田軍医が、中隊から黒滝衛生兵（同年兵）が来て手当てを手早くするも、一刻を争う背中から心臓の脇を貫通された患者である。出血多量、でも意識があった。軍医は「血液型が同型の者出てこい」に、五、六人から少量ずつ採血して輸血するがままならない（疲れきっている兵達なので、採血も気の毒であった）。

周りに手を組み無言で立っている。軍医が必死に注射、最後に強心剤を打つ、いくらか楽になったようで呼吸も落ち着いていた。そのころ電話で軍医が呼ばれて乗馬で駆けつけていった。黒滝衛生兵に託して急変

があつたらすぐ電話しろと言ひ残して。時々もがきだすので、田和小隊長が「河、何か聞いてみる」と言う。耳許で囁いたら、かすかに「起こして」と声にならない声で「東、東」というので皆で向きを変え、支えているところへ軍医が駆けて来て、「どうした、どうした」というと、郷里の妻子に最後の事を言うらしいが言葉にならず、口だけがかすかに動く。軍医が手を持って脈拍をじっとみており、片手に聴診器を握る。突然「水だ、水だ」と叫ぶが兵の水筒は空っぽ、軍医の当番がいち早く水筒を出して「河、口元にやれ」と。

しかし口を濡らしただけで喉には通らなかつた。顔面が真っ青になり軍医が聴診器で最後まで見届けてくれた。後で支えていた兵が静かに横向きにして寝かせた。皆で合掌してしばらく何も言わないが、奈良はいつも寝ている顔と何等変わらない。頬に一筋の涙が光っていた。

明日は我が身かと思う、人生とはなんとほかない命である。女にしても良いほどの華麗な名砲主が長沙目

前にして逝つたことは残念な思いが絶えない。

黄昏の長沙は陥落したと見えて、市内から火災が方々に上がり、弾薬庫、石油タンクに引火して時々大音響と共に火柱が上がる。行く道筋に地雷が至る所に布設してあるので人馬が触れて吹き飛ばされる様は、三途の川か、三途の通り道でもある。

秋田出身の生き残り兵たちが集まり、奈良を家の中に入れて通夜である。飯盒に水を入れて枕元に供え、各班から届いた夕食を共にしつつ生前の彼の話をしながら、車座になり夜遅くまで語りあつた。この眠れぬ夜に、中隊長が正装で当番兵を従えて吊問に来てくれた。一同が緊張していると「皆、ご苦労」と言つて、奈良の顔の白い布をとり、座つて、かすかに震えて拜んでいる隊長を見ると涙がとめどなく、もらい泣きした。隊長は立つて奈良に最後の敬礼して「明日もあるから、お前等も早く休むように」と言われた。

入隊時には県人十五、六人いたが、戦闘で倒れ、戦病死、負傷して内地送還なり、命永らえている者は今は九人しかない。

思えば原隊で面会に来る度に招待された時の親子の顔が目につかび、今ごろ夫の無事を念じて、陰膳を供えて二人の男の子を横に寝かせて夫の夢を見ているか。それとも胸騒ぎしているのか眠れない夜でいると思う。

眠れぬ夜も明け、出発命令が出る。奈良を毛布に包み段列駄馬の空いている「東洋号」に駄載して隊の最後尾に、私が曳いた。この日は状況の変化もなく穏やかな天気だった。夕方大きい部落に宿営することになったので、ここで中隊長が茶毘に付すことを指示してくれた。隊長は一番大きい住宅に家財道具を入れ、その中に奈良を置いて、火葬を営むことを指示してくれた。

中隊全員が整列して「捧げつつ」黙禱する。葬儀を司る神職が、一兵卒とも言えども司る（三人）。「父母妻子を残して亡夫が草むす屍とかえりみもせず、水漬く屍、なにもものぞと、不落を誇る敵陣地に夜を昼についで猛攻の吹きくる風も生臭く、弾雨の長沙を目前にして逝去さる……」と。次に三人いた僧侶が、袈裟をま

とい、左手に数珠で合掌「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と唱えながら長いお経に入り、皆頭をたれて合掌する。お経が終わり「頭右！ 直れ」。県代表に元火を命ぜられ、点火する。青い煙が天に昇り「国に帰れよ……国に帰れよ奈良」と心で唱えた。

隊長は目頭を拳で押さえて「奈良くん、星になって妻子の所へ帰れよ」。その後ろ姿を見て皆がもらい泣きした。火葬と炊事の煙が上ったので、敵に所在がわかり、かねて中隊も警戒していたが、散発的で別に気にするほどのこともなかった。私は屍衛兵に立哨しながら、奈良の妻子がどんな思いで暮しているだろうか、ああと思う、ただ炎をみているだけだった。

夕食にしようかと思う所へ、北村軍曹が命令を受領し乗馬で駆けて来た。中隊長は差し出された通信紙を見てこわばった顔をして「この馬鹿！ 今、戦死者を火葬にしている時に煙を出さずに済むか」。これは火葬の煙が敵に知れ、間もなく攻勢に出てくる。出発準備を整えるようとのことだ。隊長は俺が帰るまでに準備をしろと、高田少尉に命じ暗闇に馬を急がせて行っ

た。その間に茶毘の焼け跡から、スコップで奈良の遺骨を取り出し、彼の飯盒に入れ、三角巾に包み、いつでも出発出来るように駄載をした。

中隊長が帰って来て高田少尉に「お前の言う通りになったなハハア」と二人で笑って同行していった。これは中隊長の方便で、俺の居ぬ間に火葬を終わらせるようにとの温情であった。

戦争の悲惨さ、人生の無情の風は冷たく、今日、明日は我が身かと風前の灯、まだ小さく炎を上げている茶毘の焼け跡を奈良君の墓と違って水筒の水を供え、野菊の花とタバコも供えて合掌し冥福を祈り、目礼をして別れを告げた。

我々は後髪を引かれる思いで、連隊の配属で師団の尖兵となり、長沙を敗走した敵を捕捉殲滅せよとの命令により、追撃戦に出発したのである。

【解説】

追撃第一大隊の編成

昭和十二年九月、東京で動員、中国に派遣され、上

海付近の作戦に参加して以来、武漢地区にあって諸作戦に参加していた。

大隊は三中隊、大隊段列からなり、九四式軽迫撃砲三六門を装備する。

昭和十五年九月、八〇人を削減（陸支機密第一七四号）され、人員八八三人、馬匹四二九頭となっている。

第一次長沙（加号）作戦

当初、加号作戦として計画が策定されていたが、昭和十六年九月二十九日「長沙作戦」と命名された。

九月十日、第十一軍阿南軍司令官は作戦計画に基づき、概要次の通り攻勢発起に関する軍命令を下達した。

一 軍ハ九月十八日攻勢ヲ開始シ新墻河岸地区ノ敵ヲ撃破シテ長楽街付近ヨリ下流汨水ノ線ニ進出シ爾後ノ攻勢ヲ準備セントス

二 第四師団（戦車第十三連隊（軽装甲車二中隊属）、野戦重砲兵第十四連隊、独立山砲兵第五十二大隊、追撃第一大隊、無線電信約一小隊、支那派遣軍化学

戰教育隊、第二師団第三・第九師団第五兵站輜重兵中隊、防疫給水部出張所配属)

九月十七日迄ニ一部ヲ新墻河及沙港右岸ノ線ニ進メタル後、十八日早朝同河左岸敵陣地ヲ突破シ、爾後主力ヲ以テ粵漢線方面ニ進出シ早洩支隊ノ同方面ノ掃蕩ニ協力シタル後、速ニ汨水ノ線ニ進出スヘシ

三 早淵支隊

四 第三師団

九月十七日迄ニ第四師団ト連撃シテ一部ヲ沙港右岸ノ線ニ進メタル後、十八日未明ヨリ同河右岸ノ敵ニ対スル攻撃ヲ開始シ九月二十日頃蘭市河付近汨水ノ線ニ進出シ爾後ノ攻撃特ニ渡河ヲ準備スヘシ

五 第六師団

六 第四十師団

不期遭遇戦について

河越氏は、亀川連隊長の思ひ出を話されているが、同連隊長は、第四十師団の歩兵第二三六連隊長である。長沙作戦の編成を見ると、迫撃第一大隊は第四師

団が配属されているが、長沙作戦展開前における第四十師団不期遭遇戦では、同師団歩兵第二三六連隊の指揮下にあつたと思われる。

九月十三日、師団主力もまた港口北方五キロの一带において、激しい不期遭遇戦を展開していた。すなわち十一日重松支隊(第四十師団、歩兵第二三四連隊長)交戦の報に接した師団は、主力の進出を容易にするため翌十二日まず歩兵第二三六連隊(第三大隊欠、長 亀川良夫大佐)を鷄婆嶺付近の要線に進発させ、師団主力は翌十三日朝南下を開始した。しかるに鷄婆嶺付近には既に敵影なく、亀川連隊も十三日七時、師団開進地の胡野溪に向かい前進した。

一時間ほど前進した亀川連隊は、砂河を徒渉中、猛射を受けた。同連隊は第一、第二大隊を並列して攻撃したが、東西から包囲するように攻撃してくる重慶軍に対してはいるうちに、いつしか両大隊の間には相当の間隔ができていた。重慶軍はその間隙から侵入し、両大隊の背後はもちろん連隊本部にも迫ってきた。

十三日夜は終夜間断なく射撃を受けたが、翌十四日

九時頃攻撃を再開すると、重慶第五八軍は既に退いた後だった。(夜射撃をし、その間に退却したか)

九月十八日払暁、第十一軍は一斉に攻撃を開始した。

第四十師団は十七日夕、次のとおり攻撃準備を完整展開した。

歩兵第二三六連隊(亀川部隊)小塘付近

歩兵第二三四連隊(重松部隊)团山坡

十八日未明、隠密に沙港河を渡った兩翼隊は、天明とともに歩砲の戦力を結集し(迫撃第一大隊含む)一挙に揚林街東西の既設陣地を突破した。その後、亀川部隊は順調に南進を続けて夕刻には胡小保付近に進出した。

胡小保で一夜を明かした亀川部隊は、十九日未明右追撃隊となって関王橋を経て南進し、团山(関王橋南八キロ)付近の隘路口で敵第六十師団を撃破したのち、東進して同夜横山橋付近に進出した。そして師団は平江に向かったのである。

この十八日に、体験者河越氏の戦友奈良氏は戦没

し、夜茶毘に付し遺骨を飯盒に収め、十九日未明出發したのであろう。

三亭溝の戦い

従軍の思い出

愛知県 川嶋 正 巳

昭和十二年七月七日、北京城外蘆溝橋において演習中の我が部隊に対し、支那軍は三回に及び小銃二、三十発を撃ち込んだ事件があり、日支両現地軍が小銃り合いを起こした。その抗争がたちまち拡大して、我が国は内地部隊の派遣を決し、支那(中国)では中央直系軍が上海附近に集中を開始した。

八月十三日、上海の我が特別陸戦隊(約五〇〇〇人)が突如小銃射撃を受けたが応戦し、これは鎮静した。この日夕刻、支那軍は砲撃を開始し、ついに交戦状態に入った。当時の私は、豊橋の歩兵第十八連隊にあり第一機関銃中隊所屬の軍曹であった。兵営では常